北原の劇場「大正座～大正館」

大正座を私たちは「田舎の芝居小屋」と呼んで、子ども達にも人気があった。明治末期頃から準備し、篠ノ井・松代以外には、川中島平唯一の劇場として、大正元年（1912）、商工会が株式組織として資金を出し合い北原区の中央（現北原公民館北側）に設立、北原商工会が北原区の振興発展の一助として設立したといわれている。

設立当時は、「大正座」と呼称していたが、活動写真上映を機に「大正館」と改称した。建物は、14 間（約 25m）四方、延面積 625 平方メートルの大きな瓦葺きで、当時は珍しい建物であった。北側に舞台装置で回り舞台があり、東、南、西側の張り出し中 2 階付き観覧席となっており、1 等席と 2 等席に 2 分されて 5 銭位差があった。古老の伝言によれば、大正 3 年（1914）夏には、栗島すみ子が栗島小衣と共に来館し、子役として 40 日間連続出演したといわれ、また大正時代には、「市川牡丹一座」「松旭斉天勝」などの芝居・手品などが来演したという。また、「国定忠次の赤城の子守唄」「一心太助」「忠臣蔵の敵討ちの裏場面」「金色夜叉」など連続して上演され、「明日は続き物としてお楽しみ」として連日大入り満員の盛況であった。その他、手品・マジック・物まね・喜劇・寸劇・踊り・浪曲（なにわぶし）などが巡業上演された。

木戸銭（入場料）は、5～10 銭で、当時 1 銭で白の三角あめ 5 個・黒の鉄砲玉あめ 5 個が買えた時代で、子どもにとっては相当高い木戸銭であった。商工会のビラ下の無料券でよく入場したことを覚えている。昭和 5 年頃からの糸価の暴落による農村恐慌・銀行支払停止などにより世界的経済不況により大正館の運営も苦しくなり、遂には昭和 10 年（1925）に解散・処分し終りとなった。現在は一般住宅地となっている。川中島平、特に篠ノ井・松代以外になかった劇場（田舎の芝居小屋）として近隣の人達から親しまれ愛された娯楽の殿堂だった。

（出典：川中島町北原区の「ふるさと歴史探訪」P.P.169-170 より一部抜粋）